

膨

大な年度予算と権力の座をめぐって魑魅魍魎が渦巻いた「日本大学総長選挙」は、6月19日、ついに決戦の日を迎え、酒井建夫・生物資源科学部学部長が、現職の小嶋勝衛総長を下し、第12代総長に決定した。総票数2809票のうち、酒井氏が1442票を獲得、小嶋氏が1111票、残る256票は白票という接戦となった。

本誌ではこれまで、日本大学現、

日本大学総長選挙の魑魅魍魎 ①

日大に誇りは戻るのか

中英壽常務理事派の動きも俄然活発で、露骨な買収工作が続いたという。

島方氏はクリーンなイメージで教職員らから人気が高く、島方氏が付いた側に大量の票が流れる可能性が大きいとされ、その動向が注目されていたためだ。島方氏は田中派の買収に籠絡されることはなく、頑としてその受け入れを拒否したというが、「田中常務理事から5000万円受

職常務理事にまつわる「悪い噂」や、教育機関にあるまじき金権体質、総長選のたびに繰り返される権力闘争について伝えてきたが、これが功を奏したのか、選挙間際の学内には、「次期総長にはもう一度改めて『良識ある教育機関としての大学のあり方』を考えてもらいたい、という空気が学内に満ちてきた」（日大芸術学部教授）という。逡巡する金まみれの学校運営に、そろそろ終止符を

打つ時が近づいている。大勢を左右した島方票の行方

本選前の予備選として5月13日に行われた「総長候補者推薦委員会」で、あからさまな票の買収工作が行われたにもかかわらず、決着を見ることがなかったため、小嶋氏と酒井氏の事実上の一騎打ちとなったが、両陣営の票の囲い込みはかつてないほど凄まじかったという。学内には

②

「次期総長にはもう一度改めて『良識ある教育機関としての大学のあり方』を考えてもらいたい、という空気が学内に満ちてきた」（日大芸術学部教授）という。逡巡する金まみれの学校運営に、そろそろ終止符を

氏の決意に偽りがないことを確かめた結果だという。また、本来の教育機関にふさわしい体質へ改善して行くこと、すなわち、金権主義からの脱却を目指すことを酒井氏が表明したため、島方氏は小嶋陣営を離れ、酒井氏陣営に付いたというのである。

しかし、6月上旬、渦中の島方氏が小嶋陣営を離れ、急ぎよ、酒井氏の陣営に付いたという情報が飛び込んできた。酒井氏が打ち出した「マニフェスト」は「改めて日本大学のあるべき姿を考え、品格ある『良識の府』を目指す」というものであり、これが島方氏の考えに合致し、酒井

酒井氏自身も、総長選に立候補したことで、学内の改革の必要性を痛感し、志を同じくする島方氏との共同路線を貫く決意を固めたようだ。島方氏が酒井氏陣営に付くと同時に、小嶋氏の人気は急落したという。また、小嶋氏が総長に就任してから3年間、改革に着手することなく、すべての事案が塩漬けになっていた事実が、総長選挙に出馬したことで露呈する結果となった。日を追って不利になる戦況に焦った小嶋氏は、酒井氏陣営の基盤である医学部系に



良改川資、質奈科、化へは神奈科、で、体資、制関は生物資源科学部、井教育(写真)は生物資源科学部、日大ある藤沢市の校舎

対する嫌がらせを始め、日本発の「駅上大学病院」として、東武東上線下板橋駅構内に移転を予定している日大板橋病院の建設事業について難色を示し始めたという。

日大板橋病院は老朽化が進み、最新医療設備を導入する必要もあるため移転を計画していたところ、約4畝の土地に1000床規模の大規模医療施設を含む、医療をテーマにした新しい街づくりを実現するという東武鉄道のプロジェクトに誘致された。これは日大にとって非常に良い話なのだが、小嶋氏の対応は、手に収めるはずだった巨額利権を他人に渡すくらいなら、自らの手で潰し

てしまいたいかのように見える。投票日前日の6月18日、学内では中立的な正統派として知られる工学

部学部長の出村克宣氏、経済学部学部長の小柳治宣氏が酒井陣営に付いたとの情報が入った。医学部学部長の片山容一氏は酒井・島方陣営への協力を、2人が共同路線を歩むことを公表した当初から表明している。勢力争いは投票間際まで続いたが、関係者の大方の予想は酒井氏圧勝というところで一致していた。

期待される体質改善

はたして6月19日、各地の日大校舎で総長選挙の投票が行われた。各地で投じられた票は、すぐさま東京・九段の本部に集められ、即日開票された。結果、冒頭の通り、酒井氏が勝利したが、現職の小嶋氏には予想以上の票が集まった。これは、酒井氏の背後に田中常務理事の影がちらちらと見えていたことによる、職員らの「田

中氏嫌い」の結果と見られている。今後、総長に就任した酒井氏が理事長を任命することになるが、「黒い人脈」が取り沙汰されている田中常務理事については、文部科学省が3年前の総長選時よりも強い難色を示しており、「田中氏を理事長の職に就かせるようなことがあれば、補助金カットも有り得る」（文科省幹部）という。誰が理事長に就任するのか、しばらく目が離せない状況だ。

学内には今、酒井新総長、島方氏らを中心とする「新しいうねり」が起きつつあるという。教育機関とは程遠い「悪い噂」や「黒い金」にまみれた権力闘争を長年に行ってきた日大総長選だが、ひとまず今後の浄化が期待できる決着を見たといえるだろう。これまで蔓延してきた金権体質の一掃は一筋縄では行かない。

まずは、小嶋氏が封印しているという田中常務理事に関する「調査報告書」を開示し、学内の膿を出し切ることから始めなくてはならない。

田中常務理事と癒着して裏金を捻出したと噂される株式会社技三や、小嶋氏を長らく支援し、選挙資金も捻出したとされる野村理事が社長を務めるアルテカ・グループ、日大の建設工事を請け負った大手ゼネコン数社について、国税も興味を持っているという。アルテカのメインバンクの調査によれば、利益はほとんど計上されていないという。どのようにして巨額の選挙資金を用立ていたのか。また、技三にしても小規模な会社と聞くが、両社に共通するのは、大手ゼネコンから多額の裏金が流れていると噂されることだ。教育機関として本来あるべき姿を取り戻し、選ばれる大学として学生のみならず社会に認められるかどうか、これからの大学存続の鍵となる。100万人のOB諸氏の誇れる母校として「良識ある教育機関」への体質改善を期待したい。



日大の新しい総長に選ばれた酒井建夫氏